真理探求法について

瀬端隼也

愛犬ハルと祖母吉代と家族に捧げる。

【目次】

倫理について.....1
論理について.....2
ソクラテスの探求法.....2
デカルトの探求法.....4
私の探求法.....9
むすび.....14
参考文献.....14

この短い解説のすべてについて当てはまることだが、これらは私が正しいと考えるものであって、その正しさはあなた自身が判断するしかない。

倫理について

倫理について、私は人のなし得る探求法はないと思う。あなたが無神論者であれば、到底納得のできるものではないだろうが、倫理は神がすべての人々を愛することによって与えられる、それ以外に人が倫理において真理を見い出す術はない、私はそう思う。

倫理の探求において、人のできることは少なく、しかし、次のことで十分であると思う。つまり、神を愛し、人々を愛する。そして、このことを深く知るために、私が勧められることは新約聖書を読むことである。

そこには、神は人々を愛しているから、探し求め門をたたく者に、ただそれだけですべてを与えてくださると書かれている。

この本で紹介するように、各々が探求法によって原理を見つけたことになぞらえれば、新約聖書の原理は、神は愛である、と私は思う。そして、新約聖書に書かれた教えを守れば自ずと各

人に心の平安が与えられると私は確信している。

論理について

論理について多く語る必要はないと私は思う。それは後ほど紹介するデカルトの主張の通りと私も思うからだ。かといって、予め何も説明しなければ後の章を理解することに支障がでるだろうから、ここで論理の基本的な知識についてのみは説明をしておこうと思う。

論理の最も重要な道具は、言葉である。人は言葉で考え、言葉で伝え合う。考えは、情報と言い換えても良いかもしれない、あるいは、認識と呼ぶべきかもしれない、いずれにせよ、どちらも言葉によって主な表現を得る。

その他の表現法もある、その広がりは大きいと思う。中でも重要なものは、数や図である。これらは、言葉の一種とさえ言える。

真理の探求法が主題である。真理に必要な条件は真であることである。その逆を偽であるという。そして、真偽の判定の対象となる一つに定まった言葉の集まりを命題という。ここで、命題は言葉であるが、真偽を問うているのはその言葉で表現されている考え、情報、認識であることを理解することが大切である。

それは、曖昧な捉えどころのない人の考えをせめて表現だけでも一つに定まったものとして、考慮の対象にしようとする工夫である。

論理について初めに伝えなければならないことは、思いのほか少なく以上である。しかし、ゆっくりと考え、自分なりの理解を深めてから次の章に進んでもらいたい。これから繰り返し指摘されるが、物事は簡単な方法で考えるべきである。仮に、特殊で特異で複雑な方法を用いようとするならば、まず、その効果について吟味すべきであって、さらに、その適用範囲を間違えないことである。

ソクラテスの探求法

ソクラテスの探求法は、その真髄が『ソクラテスの弁明』p23-39 に書いてあると私は思う。何事も伝聞を慎みできる限り原典にあたることを大切にすべきで、これもその短さに比して十分な価値がある。

ここでソクラテスは、彼が最も賢いとの神託を得たという。しかし、ソクラテスは自らを賢い

とは思っていなかったので戸惑い、反証のために自分よりも賢い者を探すための歴訪をした。結果は、どの人物も何かを知っていると思っているが、ソクラテスは何事をも知らないと自覚しているという違いを知ることであった。そこで、ソクラテスは、最も賢く大切な知恵は、自分が知っていないということを知ること、人の知恵の浅はかさを自覚すること、であると神託の意味を悟ったという。

この際に、ソクラテスが行った問答は問答法といい、人の知っていることの限界を明らかにし、さらにその限界を超えて新たな知恵を得るという意味で産婆法とも称される。この問答法がソクラテスの真理探求法といえ、その結果、見い出した真理が上記の無知の知といえる。

ソクラテスの問答法では、徹底的に問いを発し、命題を定め、前提をあぶり出し、根拠を見つけ、推論を続け、矛盾を突き付ける様子が描かれている。

説明すると、ある命題に問いを発すれば、その正しさを主張するためには根拠が必要になる、その根拠も命題であり、正しい命題から正しい命題を導き出す命題間の関係を推論という。推論を繰り返し連ねることを演繹という。真偽の両立する命題を矛盾という。

そして、ある推論が正しいとき、その二つの各命題の否定の逆向きの推論も正しく、これを対偶という。矛盾が発見されるとこの対偶によって演繹を逆にさかのぼれば、先に出たすべての命題が矛盾する。したがって、最も初めにある命題、これを原理などと呼ぶが、原理も否定されてしまうのである。

ソクラテスの問答法によって矛盾を突き付けられた論者は、そのため新たな根拠、原理を探求する必要に迫られ、新たな理論を生み出す動機になるわけである。そして、少なくとも次のことに気付くのである、どんなに原理を定めても原理に根拠はないこと、原理に確実な正しさの裏付けはないということをである。

では、原理には根拠による正しさがないから価値はないというのだろうか。そうではない、原理の適用範囲における演繹によって適用された命題の正しさ、これについては原理の正しさを確認できるのである。ただそれが、人の確認できる範囲は狭く、確実さもないのである。しかし、真理探求によって微々たる改善はできるということである。

さらに、人の知恵の浅はかさを自覚し、知恵を捨てた方が良い、知恵を否定すべきだとソクラテスは主張しているのだろうか。そうではない、少なくともソクラテスはより良い知恵、真理を探求することを尊び、その手段として問いを発し、無知の知を見い出したのである。

とはいえ、ソクラテスが人の知恵と神の知恵の違い、価値の違いを主張しているのはたしかである。特に、倫理についての知恵を重視し、倫理についての知恵においてその差を顕著に主張

している。ここに真理探求法の前に、やはり真理探求の価値の問題が表れている。

ソクラテスは自ら知らないと宣言するように、明確な答えを持っていないように思われる。しかし、読者にとっては最も大事な点であろう、目的に意味がなければ手段にも実行にも意味がなくなってしまうからである。

これは倫理の問題であるから、上述の通り私は新約聖書に習っている。聖パウロは愛がなければ信仰さえ価値はないと宣言した。では、真理探求も愛がなければ価値はないのである。人の知恵、学問の真理探求であればなおさらである。逆に、愛があれば学問も労働も、草木が花を咲かせるのと同様に生命の価値がある。

そして、ソクラテスの無知の知が賢者の知恵をおごりとして打ち砕いたように、新約聖書も神は賢者ではなく素直な子供のような小さい者を尊び、貧しい者、罪ある人、病人、弱い者をより深く愛されたとある。このことは、この短い本の主題である人が行う真理探求についての戒めであり、価値付けとして有意義である。

つまり、生み出した知恵を分かち、人のために役立てよ、悪に利用するなということである。新約聖書は、真理探求の目的である真理の価値について次のように宣言する、真理はあなたを自由にすると。この真理が主に倫理においての真理であることを注意しょう。

まずは、以上のことをゆっくりとじっくりと考えて理解し、特に命題に問いを発し、その逆の根拠から結論を得ることが推論であること、つまり、疑問と推論が逆の関係であることを身に付けることが大切である。その論理の要諦をソクラテスは発見したといえる。

デカルトの探求法

デカルトの探求法は、その真髄が『方法序説』p27-29 に書いてあると私は思う。原典にあたるべきことは先ほども述べた。これもその短さに比して十分な価値がある。

デカルトは科学思想の祖ともいえる。彼は代数と幾何を結び付け空間を座標で表すことを発見した。その後の多くの科学理論はこの発見に基礎を置いている。科学のみならず哲学者としてソクラテスと同様に論理の基礎付けを深めた。

『方法序説』の正式名称は、『理性を正しく導き、学問において真理を探求するための方法序説』である。デカルトは、後に解説する真理探求法により、彼の第一哲学原理「われ思うゆえにわれ在り」を発見し、神の存在証明と共に人間精神に理性を見い出し、理性を正しく導けば学問において確実な真偽の判断を行うこと、そして真理を発見することができると考えた。そ

の真理探求法をこの本で解説している。

つまり、デカルト以来、現代に至るまで命題の真偽の判定は、少なくともデカルトの方法論、その水準を求められてきた。これによりデカルトは哲学、科学を含めて現代文明の基礎を築いた学者といえる。以下に、彼の真理探求法『方法序説』p27-29 を引用しつつ、要点を解説しょう。

まず、「論理学を構成しているおびただしい規則の代わりに、一度たりともそれから外れまいという堅い不変の決心をするなら、次の四つの規則で十分だと信じた」と宣言する。真理探求のためには、著名なアリストテレスの三段論法さえ不用と彼は説く。有用で簡便な法則をきちんと使いこなすこと、これが真理探求のためのコツという。ソクラテスと同様の態度である。

デカルトは四つの規則というが、その中心には順序立てられた演繹があり、第一規則は真偽判定法、第二規則は命題の分割、つまり対象の分解、第三規則は命題の結合、つまり対象の構築、第四規則は全体の見直しと確認を行っている。一つ一つ見て行こう。

「第一は、わたしが明証的に真であると認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れないことだった。言い換えれば、注意深く速断と偏見を避けること、そして疑いをさしはさむ余地のまったくないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何もわたしの判断のなかに含めないこと。」

第一文の最も大切なポイントは、判断するのは「わたし」であること。偉大な誰かが言ったからとか、皆が言っているから正しいとか、ではなく「わたし」がはっきりと正しいと思うことのみを受け入れ、それ以外は受け入れないということである。

では、なぜ自分よりも賢そうな誰かの判断ではなく、自分の判断の方が正しいと言えるのかといえば、個々人にそれを判断する理性がそもそも備わっているからである。理性を正しく用いれば正しい判断は誰でもできるという前提がここにある。

さらに、第二文では、ただの真ではなく、明証的に真とはいかなるものかが述べられる。つまり、正しさの判断を誤らせる恐れがある速断と偏見を注意深く避けること。さらに、明証的に真であるものの条件として、疑いをさしはさむ余地がないことを挙げる。さらに、条件として明晰性つまりはっきりと、判明性つまりよく理解できるように、精神に現れるものだけが明証的に真であるという。かつ、それ以外は何もわたしの判断のなかに含めないこと、と徹底するのである。

なぜそこまで徹底しなければならないかといえば、先程指摘した、一つの矛盾が原理を含めて全体を偽とするという議論、理論の性質を思い出してほしい。

残り三点、この第一規則について指摘しておこう。まず、疑いをさしはさむ余地があると真ではない、というこの真偽判定の基準は社会で広く用いられている。刑事裁判での有罪判定は有名である。学問はもとより政治、ジャーナリズムでも批判精神あるいはクリティカルシンキングという名で社会制度自体にこの判定法が取り込まれている。

デカルトの時代の学術は古典継承が多く現代の学術とは違っていた、あるいは、情報の溢れる現代では真偽判定は容易などという意見は間違いである。多くの学者も市民もそれほど変わらず人の知識を学習という名で鵜呑みにし、速断と偏見の排除は容易ではない。それは、どんな時代でも多くの人が社会的な名声・権力・富に惹かれ、時間と生活に追い立てられているからである。

三点目、ソクラテスと比較しょう。ソクラテスもデカルトも真理を探求し、その手段として命題の真偽に対して疑問を抱いた。ソクラテスは、人間が正しいと判断できる命題はほとんどないか、まったくない、この命題だけが無知の知として正しい、と主張したといえる。

デカルトは、われ思うゆえにわれ在り、はゆるぎなく正しい。それも根拠なく正しいと判断するしかない。したがって、この命題を根拠なく正しいと判断できる理性がわたしにはあるのだから、同じようにわたしが明証的に真であると認めることであれば、その他の命題でも正しいと判断して良い。そこで、これを第一規則とするという。

つまり、ソクラテスもデカルトも真理の新たな発見を尊び、それぞれの真理探求法を編み出し、それぞれの哲学原理を見い出したけれども、その哲学原理は異なり、それに伴って各命題に対する態度も違うのである。前者は、無知の知以外の命題には確実な正しさはないと主張し、後者は、われ思うゆえにわれ在りほどの正しさがあれば、その命題は根拠なく確実に正しいと主張して良いと。

私は、この点においてはソクラテスに分があると思う。それは、根拠のない原理は適用においてのみ正しいと考えるからである。この世界にはどんな生命があるのかも、どんな知性があるのかも、どんな真理があるのかも人はほとんど知っていない。したがって、われ思うゆえにわれ在り、がどこまで通用するのかには大いに疑義があるところと感じる。デカルトの先見性がはるかに時代を超えているとはいえ、少なくともデカルトは、相対性や極小・極大の世界が明らかになってきた現代科学を知らないし、生命や認識の枠組みについてはまだまだ分からないことが多いと思うからである。

なお、デカルトのように原理を根拠なく正しいと判断するにせよ、私のように狭い適用においてのみ正しいと判断するにせよ、どちらにおいても正しいと判断するには理性が必要であろう。理性が先天的に与えられているのか、経験としてこの世界から与えられるのか、生物とし

てその両方なのか、与えられることが決定的なことだったのかについて私は何も根拠を持たない。しかし、命や存在に付随する決定的なことだったのだと私は確信している。一つ、正しい判断をすること、さらに普遍の真理を見い出すこととは、多くの命や存在を未来に繋ぐための予測を得ることでもあることを指摘しておこう。私の考えでは、人に限らず十分に大切なことを理解する理性が与えられている生物は多いと思う。ただ、その理性はすべてのことを疑問なく明確に理解するには圧倒的に足りない、そう思う。

「第二は、わたしが検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割すること。」

ギリシャの数学者ユークリッドは、命題の正しさを明かすために、その正しさを問う中で否定しょうのない単純な原理までさかのぼり、それほど多くないそれら小さな命題を根拠としてすべての問題を順序立てられた演繹の中で証明していくという、科学理論の枠組みを初めて著書「原論」で示した。

デカルトは、この幾何学の論理構成を参考にしたという。難問、つまり、難しい命題の真偽を明かすには、命題を小部分に分割することとデカルトはいう。この本の章「論理について」で言葉は考えの表現であると述べた。表現を分割するとは、考えを分割するということである。何を考えているのか、その何かを対象という。つまり、命題を分割するということは、考えている対象を分割、分解することなのである。

例えば、社会に適用される法を考えよう。社会を分割するとは、社会が何からできているかを考えることである。簡単に人、物としょう。そして、人と物の様々な関係を言葉で表現し、ある場合は正しく、ある場合は正しくないと命題を立てるのである、それが法である。そして、難問があり、これを解決するために倫理、社会、政治、経済などを探求し、普遍的な法原理を立てるのである。そして、法原理から演繹して正しい法や事実を是とし、正しくない法や事実を非とするのである。

機械を考えてみよう。機械とは、社会の中で人々の必要を満たすために機能する物体である。その必要を満たすためにどのように物体が機能すれば良いかを分解していき、普遍的な機能を持つ必要なだけの小部品を設計していくのである。その小部品は、まず物体として存在するのではなく人の考えの中にあり、言葉や数や図の命題で設計されるわけである。

普遍的な真理がなぜ小さく単純で認識しやすいのか、その条件が知性の本質によるのか、所与のものなのかは分からない。しかし、小さく単純なものが認識しやすく、その真偽の判定も容易であること、逆に、大きく複雑なものが認識しにくく、その真偽の判定も難しいことは分かると思う。そして、真偽の判定が容易な命題を根拠として、それが難しい問題の真偽を判定しようとすることは自然である。逆は成り立たない。

「第三は、わたしの思考を順序にしたがって導くこと。そこでは、もっとも単純でもっとも認識しやすいものから始めて、少しずつ、階段を昇るようにして、もっとも複雑なものの認識にまで昇っていき、自然のままでは互いに前後の順序がつかないものの間にさえも順序を想定して進むこと。」

ここでデカルトは、命題を考える順序が大切だと説く。その順序は、単純で認識しやすいものから複雑で認識しにくいものへ、と決まる。それは、第一規則で定めた正しいことを一つ一つ確認して前に進んでいく演繹のためである。その際に、第二規則においても同様だが、明確には認識しづらく正しさに疑問の余地のある命題は、排除ないし分解されていくわけである。

デカルトは最後に、自然のままでは互いに前後の順序がつかないものの間にさえも順序を想定して進むこと、とまで申し述べる。この仮定は強引ではないかと感じるところもあるかもしれない。しかし、原理以外の命題の証明には根拠が必要であることを考えれば、必然的に各命題には順序が必要となり、想定するしかないのである。つまり逆に、その順序が付かなければ証明もできないが、あくまでも想定であって証明できるかできないかは別問題である。

ちなみに、わたしの思考を順序にしたがって導くこと、つまり順序よく命題を証明していくことが、対象を確実に構築していくことであることは、第二規則の説明から明らかであろう。

「そして最後は、すべての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして、なにも見落とさなかったと確信すること。」

何度も説明を繰り返しているが、人の正しい考え、正しい理論というものは全体がつながり合っており、そのため、ある部分が正しくある部分が正しくない理論が全体として正しいということはないのである。正しくない部分を排除して正しい部分のみで理論の全体を構成できるのであれば、それは正しい理論となるが、ある部分に間違えがあればそれが他の部分の正しさをくつがえす、それが理論の全体と部分の基本的な関係である。

ほんの一つの矛盾でも理論は崩れるのであるから、デカルトの言うように、一つ一つ命題を確認して全体を見渡す必要がある。法律であれば解決できない問題があれば改正が必要であり、機械であれば機能しない部品は改良が必要であり、科学理論であれば実験に合わない命題があればその修正が必要なのである。ときにそれは部分的な修正で済むこともあれば、全体に影響する原理の修正が必要なこともある。

四つの規則を述べた後にデカルトはいう。
「きわめて単純で容易な、推論の長い連鎖は、幾何学者たちがつねづね用いてどんなに難しい証明も達成する。それはわたしに次のことを思い描く機会をあたえてくれた。人間が認識しう

るすべてのことがらは、同じやり方でつながり合っている、真でないいかなるものも真として受け入れることなく、一つのことから他のことを演繹するのに必要な順序をつねに守りさえすれば、どんなに遠く離れたものにも結局は到達できるし、どんなに隠れたものでも発見できる、と。」

これがデカルトの真理探求法の核心である。つまり、確実な演繹を踏めばどんな真理にも到達できるという仮説である。

逆にいうと、確実な演繹によって到達できない、人間が認識しうることがらを真とみなすことはできるのだろうか。つまり、それには確実な根拠は決してないということになるが、原理を除いてそのようなことがらを真理とはいえないだろう。

くわえて原理であれば、多くの適用によってその真であることを確認できるが、それは演繹の出発点になっているということである。そこでデカルトの言及を一歩進めれば、少なくとも人には、演繹と切り離されたことがらを真理と呼ぶことはできないといえるだろう。

「人間が認識しうるすべてのことがらは、同じやり方でつながり合っている」という言及については、それと演繹との関係を含めて、次章によってより深く理解することができる。

私の探求法

私は２０代の頃、自動的に文章を分類するアルゴリズムを研究していた。そのときに、この世にあるすべてのものとは何なのだろうかと疑問を持って探求し、次のような考えに至った。ただし、当時から今に至る考えを整理して以下に記す。

私は、考えるときに何かを必要としている。つまり、何もなければ私は考えられない。そこでまず、次の第一原理を見い出した。

私が考えるならばいずれかの対象がある。

次に、ただ一つの対象を思い浮かべて思った。一つの対象だけでは何も分からない。ただ、それがあるということだけで、それが何なのか一歩も考えは進まないのである。そこで次のように推論を進めた。

少なくとも二つの対象が必要である。

さらに、仮にその二つの対象が何の関係もなければ、やはり、わたしはそれらの対象について

何も知ることができないと気付いた。そこで、次のように推論を進めた。

少なくとも二つの対象とその関係が必要である。

ここで、関係とは何かという疑問が浮かぶ。それは少なくとも考える何かであるから、対象である。くわえて二つ以上の対象が必要であり、その間の何かとしか言えない。

私は、さらに探求を進めた。一つの対象、二つの対象の違いとは何か、と。そこで次のことに気付いた。

二つの対象を区別するには、少なくとも一つの異なる特徴が必要である。

なぜなら、すべての特徴が等しい対象は、等しい対象であって区別すらできず、一つの対象だからだ。そこで初めて、私は異なる対象に同じ特徴を見出したときに、等しいという考えを持つと知った。この発見は私の目的であった対象の分類のために大きく役に立った。

念のため、さらに特徴についての考えを深めておこう。仮にある対象が特徴以外の何かで規定されるとしたら、その何かを持たない他の対象と元の対象を区別することができる。つまり、その何かは二つの対象の区別に使えることになり、それは元の対象の特徴そのものであり矛盾する。したがって、次のことが分かる。

対象を区別するのは特徴だけである。区別するのが特徴だけなのだから、対象は特徴のみによって規定される。

ここまで特徴という言葉を自然な意義から用いたが、結局のところ特徴とは何かといえば、ある対象を規定し、他の対象から区別する何か、つまり、ある対象を規定し他の対象から区別する対象というしかない。したがって、上記の議論はこの定義にしたがえば自明なことである。しかし、ここまでの議論によって、対象の特徴、規定、区別、等しさ、そして分類という言葉の関係が明確になっていることに注意されたい。

そして、私はこの特徴の自明な定義では満足しなかった。なぜなら、すでに第一原理を発見していた私にとっては、特徴とは何だろうか、と疑問をもったときにより本質的な答えを得るのに難しいことは何もなかったからだ。

つまり、私が考えるならば少なくとも二つの対象とその関係がある、という命題を発見した際に、対象と関係の定義からして私のすべての考えは対象と関係に捉えなおすことができると分かっていたからである。

詳しく述べれば、初めに浮かんだ考えに対象と関係が必要であれば、その後に浮かぶすべての考えも初めの考えと考えという点においては異なるところがないのであるから、やはり対象と関係が必要であるし、少なくともそう整理することができ、結局、すべての考えは対象と関係を必要とするし、少なくとも整理することができる。

そうすると、ある対象の特徴とは、それも考えであるのだから、ある対象とそれ自身かその他の対象との関係であると気付いた。先ほどの特徴の定義、特徴とはある対象を規定し他の対象から区別する対象、としたが、それは正確にいうと、ある対象はそれ自身かその他の対象との関係によって規定され区別され、その関係を特徴と呼ぶということだったのである。

したがって、前述の特徴についての命題をこの定義で置き換えると次のようになる。

対象は、それ自身かその他の対象との関係のみによって規定される、あるいは、構成される。

そして、私は驚くべき結論に至った。つまり、前述の関係の定義と合わせると、

対象は関係であり、関係は対象である。

といえるのである。なぜ私がとくに驚いたかといえば、私はこの結論にいまだ何らかの例えば物理現象であるからとか、人文学であるからとか、の限定を見い出し得ていないからである。まず、私にはこれが世界の本質に由来することなのか、人間の認識の限界に由来することなのか、分らない。それから、私のように浅薄な者でも般若心経を少しでも知る者であれば舎利子色不異空空不異色色即是空空即是色の言を思い出さざるを得ない。

さらに私は、この考えが一般的にとても有用であると感じて、論理や数学や科学の諸分野に目を向けてみた。そうすると、私はそれら諸分野で見い出されてきたそれまでは何とも難解で不慣れなアイデアであったものが、すべて上記の考えに反する点が一つもなく、見通し良く整理し理解することができると分かった。

それどころか、偉大とされている哲学者、数学者、科学者であればあるほど、同様の考えに近い見解を述べていることを知り、彼らの意見をより深く理解することができるようになり、さらには、私が発見した命題は彼らが知ろうとしつつ知りえていないことであったことも知った。

何より特にソクラテスとデカルトの真理探求法を学びつつ、私自身が上記の考えを真理探求法として使いこなすようになるにつれ、数学において新たな発見をするということが難しいことではなくなり、大いにその効果を感じるに至った。ただし、学問に慣れていないと難しいと感じられることでも、数多の学者にとって新たな発見をすること自体は、簡単なことではないが

難しいことでもない。

少なくとも今の私は、私のような根拠と推論を持って、対象は関係であり関係は対象である、と結論を得た人物を知らない。そのような人物があれば、私の仕事はそのような人物の仕事をより広く世に広めることに貢献でき有意義であろう。

関係だけが考察の対象であるという考えは、私の知る限りでは古くはデカルトが指摘し、ヒルベルトの公理主義、アイレンベルグとマックレーンの圏論、コッドのリレーショナルデータベースに見られる。アイシュタインの相対論は、観察者ごとに対象との関係を捉えている。

ここでは、デカルトのみを紹介しよう。それから私が定めた真理探求法を示し、その少ない規則の意味を一つ一つ解説する。

デカルトは、数学ないし科学について方法序説で次のように述べている。「これらの学科が、対象は異なっても、そこに見いだされるさまざまな関係つまり比例だけを考察する点で一致する」と。デカルトは関係を比例とみなすことによって現代科学の基礎である座標、代数幾何学を発見したわけである。比例への置き換えを除けば、この文章は次のようになる。

「これらの学科が、対象は異なっても、そこに見いだされるさまざまな関係だけを考察する点で一致する」、私の哲学を発見した後にこの文章を改めて読んだときに、やっと私はこの文章の意味を深く理解することができ、デカルトに感服しつつ、対象は関係であるのだからデカルトの観察は正しい、あるいは、私の結論の正しさに自信を深めることになった。

デカルトがわれ思うゆえにわれ在りを根拠なく正しいとしたように、私の第一原理、私が考えるならばいずれかの対象がある、も同じくらいに正しいと私は感じる。この二つの命題が人が考える上での真理を言い当てていること、そして前者と後者は結論の向きが逆であることに関心を覚えざるを得なかった。

さて、それでは私が定めた真理探求法を次に示す。次の三つの規則を単独で用いるのでは不足を感じるときもあろうから、その場合はこれまで解説したソクラテスとデカルトの真理探求法を前提として用いると良い。規則は三つとしたが、後二者は第一の規則から導かれるものであり、実質的に第一規則を身に付ければ良い。そして第一規則自体は、多くの先人が指摘してきた規則である。

１．対象と関係に整理して考えること。
２．部分と全体の両方を考えること。
３．対象を様々な関係で捉え直して考えること。

まず、第一規則について、対象は関係であるのだからデカルトが順序を想定して考えると定めていたように、考えている対象をより単純で認識しやすい他の対象とその関係に分解することができると想定して考えるとよい。そうでなくとも、ある対象への理解とは、他の対象との関係を明確にしていくことであると理解してから第一規則を用いるとよい。そうすると時には、ある対象を他の対象の関係によって完全に再構築することができるはずである。

デカルトが重んじた演繹は変わらず重んじるべきである。それは物事を対象と関係に整理していく中で、その各一部について真偽を判定し、各部を推論関係でつなげていくことに他ならない。デカルトは、「人間が認識しうるすべてのことがらは、同じやり方でつながり合っている」と述べたが、私の哲学からすると、つながっていない対象については何も考えられない。したがって、認識しえないのであってデカルトのこの言及は正しいと思う。そして、関係でつながり合った対象に真偽の判定を下し、推論をつなげて、あるいは疑問を持って推論のつながりをさかのぼり認識しうる真理まで到達すること、これが人が学問において探求すること、考えるということであると思う。

第一規則によってある対象を理解しようと努めると、そのためにはある対象を分解しようとしまいと他の対象との関係を考えなければならない。そうすると、ある対象の理解を深めるためにはさらに多くの対象を理解する必要に迫られる。それは限りのない連鎖である。そうして、私はソクラテスの無知の知は正しいと知った。ただそれだけではなく、ある対象を理解するには、全体もまた理解する必要があると知った。全体は部分によって構成されているが、部分もまた全体によって構成されているからである。それは私の哲学の命題、ある対象は他の対象によって構成されている、と同義である。これが第二規則である。

例えば、一つの言葉は言語がなければただの音声や記号であり、ネジは入るネジ穴と機械がなければただの鉄くずなのである。これは科学理論の原理でも、法理論の原理でも同じである。演繹も適用もない原理はただの言葉なのであり、これらの機能は全体において成立している。

次に、ある対象は他の対象によって構成されているのだから、その他の対象が代われば元の対象も同じではない。つまり、一つの対象であっても他の対象によってその捉え方は相対的に変わるのである。アインシュタインの相対論は良い例だが、それだけではなく一般的に数学や科学の多くの法則がこの一つの対象の複数の捉え方によって見いだされる。あるいは広く全体を見渡して、一つの対象を二つ以上の異なる対象の中に発見することにより等しさは見いだされる。

例えば、ピタゴラスの定理は直角三角形の三辺の長さを部分たる線ではなく全体としての面の中で捉え直したときに、直角を挟んだ二辺と斜辺由来の各面積に共通の数量を見い出すのである。ニュートンの万有引力も地上の石と地球と月を別のものとして考えていては発見はなく、それが同じ物質であるという共通の対象を見い出しえたときに、地上の石が落ちるがごとく万

物は引き合うという全体における関係を発見したのである。

したがって、一つの対象をより多くの他の対象との関係により捉え直すべきである。時にはその対象自身が他の対象たちの結節点となりえるかもしれないし、何よりも全体を見渡して多くの対象たちに共通の対象や関係があればそれを原理として抽象できるのである。つまり、一つの対象でも多様な視点でとらえ直して考えること、これが第三規則である。

数学や科学の発見にはいくつかの種類があると思う。第一は、自然数や群の発見のようにまったく新しい関係を見つけることである。第二は、座標や微積分の発見のようにすでにある膨大な理論と理論の新たな深い関係を見つけることである。第三は、相対性理論のように第二と似ているが複数の理論に共通の原理を見い出して統一することである。第四は、非ユークリッド幾何学のように第三と似ているが原理の修正により類似の理論を見つけることである。その他にも色々とあろう。しかし、それらはすべて新しい関係の発見である、そう想定して良いと思う。

与えられた健康と時間はひと時の奇跡である。各自に備えられた理性を信じて、感性と個性を育みながら長く深く独自の真理を探求するとよい。

むすび

人が人の生み出す知恵によって幸福になれるのだろうか。人の知恵は道具に過ぎない。それを用いる倫理が人を幸福にするか否かを決めることは明らかである。

この本で少なくともあなたが名声や金銭を得る方法を伝えたわけではない。美しい絵を見れば心ふるえ、自然の神秘に触れれば感動もし、みな心を満たされ癒される。それはとても大切なことである。しかし、本当の幸福を探求するのであれば個人においても社会においてもそれだけでは足りない。

冒頭の通り、それは倫理おいて探求されるものである。そして、私がいえることは新約聖書を読むとよいということであり、それはあなたを本当に癒すことにもなるだろう。私はただ、若干であっても人類の幸福のためにこの道具を使って頂けるよう祈るのみである。

参考文献

「ソクラテスの弁明・クリトン」プラトン著、久保勉訳　岩波書店 2017 年 10 月 5 日 第 106 刷
「方法序説」デカルト著、谷川多佳子訳　岩波書店 2017 年 8 月 4 日 第 33 刷

２０２３年３月２７日（初版）

Copyright © 2023- Junya Sebata All Rights Reserved.